

坂戸の大宮住吉神楽

大宮住吉神楽保存会

国選択・埼玉
県指定無形
民俗文化財

大宮住吉神社 例大祭 神楽奉納 演目紹介

<令和8年4月5日(日) 9:30~15:30 >

「六合堅固(翁)の座」(りくごうけんご (おきな) のざ) <9:30~>

国固めの初座

<登場神：翁>

その日の神楽奉納の始めの演目です。翁がお祓いをして神楽を舞います。六合(りくごう)とは、国(くに)を表す言葉で、「東西南北」と「天」と「地」の6つの方角を合わせて、国を表します。この演目は、国固めの意味を持つ初座として重要な座です。翁が舞う神楽はあらゆる方角を清める「八方神楽(はっぽうかぐら)」です。

「住吉三神の座」(すみよしさんじん のざ) <10時頃~> 大宮住吉神社の祭神、海の神の演目

<登場神：上筒男命うわづつおのみこと・中筒男命なかづつおのみこと・底筒男命そこづつおのみこと>

例大祭のみで奉納される演目です。大宮住吉神社の祭神である海の神様、「上筒男命(うわづつおのみこと)」、「中筒男命(なかづつおのみこと)」、「底筒男命(そこづつおのみこと)」の3柱の神様がそれぞれに舞います。上筒男命は四方神楽、中筒男命は隅神楽、底筒男命は四方と隅の両方の八方神楽を舞います。底筒男命が出てくる時、「西の海 青海原の波間より 現れ出でし 住吉の神」との歌詠みが入ります。ちなみに上筒男命は海面を表しており、中筒男命は海中の中程を表し、底筒男命は海の底を表しているといわれています。



「倉稻魂命種蒔の座」(うがのみたまのみこと たねまきのざ) <11時前後頃~(約90分間)>

米作りの演目

<登場神：倉稻魂命うがのみたまのみこと・天狐てんこ・供奉おとも(モドキ)>



通称、「稻荷(いなり)さま」と呼ばれる稲作・五穀豊穡の神様である倉稻魂命(うがのみたまのみこと)が米作りを天狐(てんこ)という賢いきつねに教えます。天狐は神様の使いです。天狐は米作りをモドキ(供奉)といういわば農民にも手伝わせ、そのかけあいが面白く、モドキは共感を誘います。モドキは大宮住吉神楽の中では、道化として滑稽なしぐさや役割を演じ、観客目線の欠かせない存在です。モドキは稲荷さまが持っている米の入った杓(ます)を欲しがり、なんとか無事に奪った後は、観客の皆さんに無病息災のお米の1包みをお配りします。翌朝のご飯に混ぜると御利益があると地元ではいわれてきました。かつては、塚越周辺の住民が生業としてきた稲作の手順や作業を道具を使って演じます。全部で22座の筋立ての伝わる大宮住吉神楽の演目の中では主な演目の1つで、大宮住吉神社のいずれの祭礼においても必ず奉納される座です。演目の最後は、賑やかな演奏の「ニンバ」の曲に変わり、モドキが馬になり天狐を背中に載せて、意気揚々(いきようよう)と帰っていきます。

※時間は目安であり、準備等のため多少前後することがあります。

「猿田彦命四方剣拝の座」(さるたひこのみことしほうけんぱいのざ) <13時前後頃～(約20分間)>

龍の印で舞う <登場神：猿田彦命・供奉(オトモ)>

猿田彦命が両手で印を結んで舞います。印は龍の頭を表しています。供奉から剣を受け取り、さらに舞っていく座です。猿田彦命は天狗と同じと見られることもあり、瓊瓊杵尊が天孫降臨に際し、道案内をした神です。奉納は一時途絶えていましたが、平成20年頃復活しました。

「天下祭」(てんかさい) <14時頃～>

天狗を先頭に行列が参道を歩む

天狗(=猿田彦命【さるたひこのみこと】)を先頭に、神官や笛・大拍子、神社の総代・氏子等が行列を作って参道を歩むものです。これは、日本神話の「天孫降臨」になぞらえて行われるものといわれます。猿田彦命は、高天原(たかまがはら)から神様一行が降臨するのを先導したという「道案内の神様」といわれています。

「神剣貢の座」(しんけんみつぎのざ) <15時頃～(約20分間)> 剣を鍛える様子を表現する演目

<登場神：金山彦命と天狐、供奉(オトモ)>

金山彦命(かなやまひこのみこと)と天狐、そしてオトモ(供奉【オトモ】)が剣を作る演目になります。「ふいご」で火を起し、槌で打ってだんだんと剣が鍛えられていく様子を表現します。できた剣を持って金山彦命は神楽を舞います。金山彦命は、鉾山や製鉄、鍛冶の神様といわれています。なお、この座の天狐は姿が見えませんが、鍛冶を手伝う存在として登場します。

「終祓」(しゅうばつ) <約5分間>

終わりのお祓い

<登場神：山の神>

山の神が場をお祓いする1日の神楽を締めくくる座です。「悪魔っぱらい」とも呼ばれ、人々の無病息災と家内安全を祈願し、舞われます。曲は勇ましい「早笛」です。

<大宮住吉神楽について> 大宮住吉神楽の由来については、江戸時代の寛永年間(1600年代)には、東京都府中の大國魂神社に奉納されていたことが分かっており、少なくとも作られたのはそれ以前に遡ると伝わる。12座の神楽と10座の座外神楽及びその他神楽を合わせて全部で22座あり、現在舞われているのはその内の15座。神社の祭礼である4月第一日曜日の例大祭、11月23日の新嘗祭、2月23日の祈年祭で神楽が奉納されており、その他神社やイベント等での披露実績も多数ある。特徴は、江戸里神楽の古い様式を良く残していることで、黙劇仕立ての古風で素朴な神楽である。大國魂神社に奉納していた3つの江戸里神楽の流派のうち「勝呂方(すぐろかた)」として、最も江戸里神楽の原型を良く残していると言われている。江戸里神楽が興行化していった傾向も江戸期頃にはあった中でも、現在まで地元住民を中心に古い形を残し継承されている。

<大宮住吉神社の祭礼>

神楽の演目が一番多く奉納される日は、4月第一日曜日の例大祭です。午前から午後まで通常は神楽奉納が行われています。天狗を先頭にした行列が参道を歩く「天下祭(てんかさい)」も執り行われます。かつては塚越に嫁に来た人が晴れ着で参拝したことから「嫁見の祭り」とも呼ばれました。大宮住吉神社は古来、「北武蔵十二郡総社」として大きな影響力を持っていました。源頼朝の命により十二郡の触頭(ふれがしら)となり、徳川家康の江戸入府後も引き続き十二郡の触頭を仰せつかったといえます。